

副詞「よつぽど」の形成

山口 堯二

はじめに

一 原形「よきほど／よいほど」の働き

一の一 適当な時期を表すもの

一の二 適当な程度を表すもの

一の三 相当な程度を表すもの

二 「よつぽど」「よほど」の成立と発展

二の一 成立時期と名詞・形容動詞的用法

二の二 副詞化とその背景

二の三 副詞用法の広がり

おわりに

連語「よきほど／よいほど」は、古くは名詞・形容動詞的に適当な時期、適当な程度、相当な程度と三つに大別できる意味を担った。その形式からは室町時代に「よつぽど」「よほど」の形も現れた。それらにも名詞・形容動詞的用法は継承されるが、意味的には相当な程度を表す傾向が強まり、連用的には副詞の用法が普及して、それが用法の中心になった。その頃から類義の「よきころ／よいころ」「よきかげん／いいかげん」などが現れ、旧い「よきほど」系に取って替わろうとする動きがある。そのような周辺を含めた動態に、相当度を表す副詞の用法の普及する背景を探る。また、それとあわせて、江戸後期以降、副詞の用途が他と比較された相対的な程度差や、推量・推定・仮定表現、意志の持続の事後表現など、総じて志向的な表現に拡大していることも確かめる。

はじめに

「よつぽど（ヨツポド）」の原形は形容詞「よし」と名詞「ほど」の連語「よきほど」である。イ音便化して「よいほど」になるので、まとめて「よきほど・よいほど」と記す。古代語では多く「なり」や「に」を伴って名詞・形容動詞的に用いられた。室町時代にはそれから一語化した「よつぽど」「よほど」の形も現れた。それ以降の近代語では、これらの語形による副詞としての用法が多くなり、現在に至っている。本稿では、それらの意味・用法の広がりや推移を、形態の差により「よきほど・よいほど」の類と「よつぽど」「よほど」の類とに分けて探り、後者についてはその副詞化の背景についても考察する。

一 原形「よきほど・よいほど」の働き

「よきほど・よいほど」の担う意味は、「ほど」と「よし・よい」の意義によつて、三つに大別できる。第一は時間的な意味を中心として適当な時期を表すもの、第二は程度のありようについて適当な程度を表すもの、第三は適当な観点を離れて、相当な程度を表すものである。

「ほど」の時間的な意味を中心として適当な時期を表すものには次のような例がある。

(1) 夜よきほどにて、みな帰る音もきこゆ。

（蜻蛉・中・天禄二年一月）

・このほどこそいとよきほどなれとおぼしとりて、人しれずさるべき文ども見したため、

（栄花・二七・衣の珠）

・まどひおきて見れば、此女、よき程にねおきて、

（宇治拾遺・五七）

この意味の言い方が用いられたのは、鎌倉時代ごろまでのようである。その後は次に示す「よいころ」「よい時分」などの言い方のほうがめだつてくるからである。

(2) ゑびのふなづみの事。……しばらく座中をみあはせ、

よきころにばばしらをぬきて、ほばしらさきにて、ゑ

びのみをさして

（大草殿より相伝之聞書）

(3) 泣申樂をば、後日などの中程の、よき時分を考へてす

べし。（風姿花伝・三三）

・もはやゑい時分だ程に今にこべい。（雑兵物語・下）

一の二 適当な程度を表すもの

適当な程度（質的なそれと量的ありようをあわせていう。以下同じ）を表すものには、既定の状態の程度やそれに基

づく一般傾向についてプラス評価を表すものもあれば、意志や命令などの志向的な言い方と共起してむしろめざす目標を表すものもある。

既定の状態の程度についてプラス評価を表すものには、事柄の別に見て、例(4)人の身長・体形などの成長ぶり、例(5)服装・衣装の感じ、例(6)人の物言い、例(7)物事の処理などに関する例が多い。次にその一斑を示す。

(4) よきほどなる人になりぬれば、髪あげなどとかくして、
(竹取物語)
・宰相の君の、……丈だちよきほどに、ふくらかなる人の、
(紫式部日記)

(5) いとよきほどにもりいでたる女房の袖口・裾の褷、いと心ことに、
(夜の寝覚・三)

・よきほどなる御けなりにて、常に出でさせおはします。
(たまきはる)

(6) あまり卑下してもあらで、いとよきほどにもものなどもきこゆ。
(源氏・蜻蛉)

・つもる月日のをこたり、よきほどにきこえたまへる御気色ありさまの、
(鎌倉時代物語・いはでしのぶ)

(7) 信濃のはつりをいとよきほどにすげて、姫の衣に縫ひつくと、
(宇津保・俊蔭)

・御とのあぶらよきほどにて、対の君対面して、

・先作候て、能程に塩を出て、余りあつからぬ湯にて洗、
(夜の寝覚・二二)
(大草家料理書)

(4) (7)を通じて、例の多い事柄には、他の特定形容詞などでは明示しにくい、物事の兼ね合い・調和にかかわる程度のありようがめだつと言えよう。

物事の兼ね合いや調和には、過不足が禁物である。「よきほど」には、そのため、次の傍点部のように、その過不足を否定する意味で、一方または両方を打ち消す言い方が併用されていることもある。

(8) 人のほど、ささやかにあえかなどはあらで、よきほどになりあひたる心地したまへるを、
(源氏・宿木)
・おどろき顔にはあらず、よきほどにうちそよめきて御褥さし出でなどするさまも、いとめやすし。

・この童、鼻もてあげの木をとりて、うるはしく向ひゐて、よきほどに、高からず低きからずもたげて、粥をすゝらすれば、
(宇治拾遺・二五)

適当な程度を表す「よきほどよいほど」は、意志や命令などの志向的な言い方と共起するなどして、むしろめざす目標になっていることもある。次はその例である。

(9) よきほどにてかくてとぢめてんと思ふものから、ただ

ならずながめがちなり。

(源氏・空蟬)

・タトイアソバル、トモ、ヨイ程ニ遊デ礼ヲ以テセラレ
イゾ。

(毛詩抄・六2オ)

・惣じて遊興もよいほどにやむべし。

(浮世草子・世間胸算用・二・三)

第一例は光源氏との関係を現状のままに終わらせようと決意する空蟬の心中描写である。この「よきほど」は直接には既定の状態を表すが、それを承けた「かくて閉ぢめてん」との関係で、そのまま仲を終わらせようという意志の目標にもなっている。

適当な程度を目標とする言い方では、次のように程度の過度化を警戒し抑制する言い方(傍点部)が併せて明示されることも少なくない。

(10) 南の山の花の木どもの中に、二つの楼、たけよきほどに、こちたからぬほどに、たちまちにつくるべし。

(宇津保・楼の上上)

・人此レヲ聞テ、余リノ事ハ可止シ、只吉キ程ニテ可有キ也、トゾ人語リ伝ヘタルトヤ。

(今昔・二九・三一)

・ただ、謡をさきへ遣り候て、物少なに舞候。扇を皆は開かず候。よきほどにひらき候。

(禅鳳雑談・上)

これらの傍点部は三例ともその程度の過度化を戒め抑制

するためのものである。先にあげた例(9)のように、それに相当する言い方を伴っていないものも、意味上は過度化をこそ抑制する言い方である。既定の状態の程度を評価したものには、(8)の第三例のように事柄に不足のある状態を否定する言い方も併用しているものもあつたが、意志・命令などの志向の目標とする言い方では、過度化を抑制する傾向のほうが進んだ。

めざす目標として適当な程度を表す例には、疑問や打消と共に起した例もある。

(11) あしき事よき事を思ひ知りながら、埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ、と思しめぐらすも、

(源氏・夕霧)

(12) 現の人もさぞあるべかめる。人々しく立てたるおもむき異にて、よきほどにかまへぬや。よしなからぬ親の心とどめて生ほしたてたる人の……後れたること多かるは、何わざしてかしづきしぞと、

(源氏・堂)

例(11)は疑問詞「いかで」と共起する。女性が程よい生き方を保つにはどうすればよいのか、思いをめぐらす紫の上の心中描写である。打消と共に起した(12)は、物語の作中人物の話に関連して、現実の娘の教育も適度の手加減がむずかしいことを嘆く、光源氏の言葉である。「かまへぬ」の「ぬ」は打消の助動詞。適当な教育態度を保とうとしても、

なかなか保てない、その結果だけを押しえた表現であろう。下の「や」は係助詞ではなく詠嘆を添える終助詞と解してよい。

なお、室町時代までの適当な程度を表す例は、連用成分・連体成分（準体成分）・述語成分のいずれかであったが、江戸時代には「よいほど」を主語とした、次のような新しい言い方も現れた。これも過度化を抑制する意図で用いられている。

(13) 世には身をしらぬ奢もの有。天のとがめも、町人の分としてよい程あり。（浮世草子・万の文反古・一・二）
・それぢやとて、めつたに取持だてをすると太鼓持のよふに見ゆる物じやから、是にもよいほどが有そうな物なり。（洒落本・白増譜言経・五）

ちなみに、江戸後期以降、(13)と類義度の高いものとして、次のような「ほどがある」式の言い方も現れる。その「ほど」を「程度」に換えた、より新しい言い方の例もあり、併せて示す。

(14) とんだ者が来たの。生酔でも程が有たもんだ。

（滑稽本・浮世風呂・前・下）

・悪推も程があらア。

（人情本・春色梅児誉美・三・一八）

・あんだ、冗談にも程度がありますよ。

（太宰治・ヴィヨンの妻・一）
これらは、「よいほどがある」式の「よい」を省略して簡潔化を図ったものであろう。

なお、「よきほど」には、基本的にプラス評価になる、その適当な程度の意を皮肉に逆用して、これというほどの内実を伴わないさまを揶揄する、マイナス評価の表現に転用した例もある。

(15) 孝道入道、仁和寺の家にて或人と双六をうちけるを、隣にある越前房といふ僧きたりて、見所すとて、さまざまのさかしらをしけるを、にくしくと思けれども、物もいはでうちゐたりけるに、此僧さかしらしさして立ぬ。かへりぬと思て、亭主、「此越前房はよき程の物かな」といひたりけるに、彼僧いまだかへらで、亭主のうしろに立たりけり。かたき、又物いはずとて、亭主のひぎをつきたりければ、うしろへ見むきて見れば、此僧いまだありけり。此時とりもあへず、「越前房はたかくもなし。ひきくもなし。よき程の物かな」といひなをしける、心はやさ、いとをかしかりけり。

（古今著聞集・十六・五五九）

これは孝道入道が双六の対戦中、傍から種々さかしらを言われた腹癒せに、越前房への陰口に使った言葉である。が、当人がまだ傍にいたことに気づき、傍点部のごとく、

身長か何かの程度が適當である意に解せるよう、素早く言い換えたものである。マイナス評価を担ったものはこの傍線部の一例しか得ていないが、後世現れる「よきかげん」の「いいかげん」には、後述する(31)の第四例のように揶揄したり見下したりする言い方もめだつ。この例はそれと類義の「よきほど」による先例と言えよう。

一の三 相當な程度を表すもの

「よきほど」よいほど」の類で程度を表すものには、適當な程度の意に含まれていた適不適の観点を離れて、たんにある種の程度だけを担うものもある。そういう類の例も平安時代から見受けられる。その程度のありようには、文脈上、極端な高度との対比を中心に次位的な高度性のめだつ例と、高度および低度との対比においてむしろ中間度性のほうがめだつ例がある。適不適の観点を離れた程度性については、それらの例に共通する程度性を想定する必要があると思われる。

たとえば次の例の程度性は、極端な高度との対比を中心とする文脈において、次位的な高度性がめだつものである。

(16)むすめ尼君、これもよき程のすき物にて、

(源氏・手習)

妹尼の亡き娘婿である中将が小野の庵を訪れている場面

である。中将の笛に誘われ、年老いた母尼が興に乗って得意げに和琴を弾くなどしている。「評釈」はその「大尼君」の好き者ぶりをうけての語とする。「全集」も「母尼の年齢の程をわきまえぬ有様に對して」そう言つたとし、「諸謔ぎみの口調」と添える。母尼ほど極端ではないが、「むすめ尼君」もそれに次ぐ相當高度な好き者だの意と解せるのである。

次の例の「よきほど」は、曾我兄弟のめざす旅の必要度について、その程度を仮定する言い方になっている。

(17)よきほどにもさぶらはば、思ひとどまり給へかし。

(十行古活字本曾我・七)

その兄弟のめざす旅が、全くやむを得ないものならともかく、少しでも変更の余地がある程度のものなら、中止してほしいと願う母の言葉であり、この例の程度にも極端な高度を除いての次位的な高度性が認められる。

中世以降、人物の技能や素質に関しても、極端な高度(傍点部)との対比を中心とする文脈において、次位的な高度性のめだつ例が多く見受けられる。それには「よきほどの」の形で人物や技量を表す語の連体成分になっている例が多い。

(18)同心他心の人によき程のまり足は、皆右より踏初む。いたりたる堪能は左足より踏初る也。

(遊庭秘抄)

・さりながら、これもたゞよき程の上手の事にての料簡なり。まことに能と工夫との極まりたらん上手は、なにかいづれの向きをもせざらん。
(風姿花伝・三)

・まづ、すぐれたる美男はしらず、よきほどの人も、ひた面の申樂、年寄りては見られぬ物なり。

(八帖花伝書・八)

しかし、これらの例の次位的高度性は、いずれもその文脈に大きく依存している。

次位的高度性のめだつこれらに対して、その一方には次のように高低両者の中間度性のほうがめだつ例もある。それも両極との対比などの文脈に依存してである。

(9) 桜襲を、……又こくうすく水色なるを下にかさねて、

中に、花桜の、こく、よきほどに、いとうすきと、みな三重にて、

(夜の寝覚・三)

・あまり細かなるはみめよくて、たくをりにふくれて、いとくかへしかなる。あらくしたるはみめわろくて、はふれがまし。よきほどなるぞよき。

(薰集類抄・下)

・よろづの事はみな、中^ちに過^あたる事ぞなき。器量、芸能、しな種姓、才智、才学、詩歌のかた、神や仏の利生まで、よきほどとこそ折けれ。(室町時代物語・酒飯論)

第一例は、襲の色あいについて、「こく」と「いとうす

き」の間に「よきほどに」を配する。第二例も、薰物の細かきについて「あまり細かなる」と「あらくしたる」との対比において中間度性がめだつ(「かへしか」は未詳)。第三例には両極との対比の代わりに、偏りのない中庸を意味する漢語「中」がその類義語として近くにあり、その点で中間度性がめだつ。その「中」に対する高い評価は、第二例の「よきほどなるぞよき」とも共通する。また、この例は神仏に祈る事柄を指定している点で目標視もされている。しかし、これらの例にめだつ中間度性も、やはりその文脈に大きく依存している。

したがって、適不適を離れ、この形式自体が意義として担えた程度のありようは、次位的高度でも中間度でもなく、それらに共通するありようにこそ求められてよい。それは次位的高度や中間度を一つにまとめて大づかみに概括する程度把握である。その程度のありようは、そういう高度寄りの大づかみな概括性において、「相当な程度」という、かなり含みのある呼び方で呼ぶしかなさそうなものである。後述の「よつぽど」や「よほど」は副詞として「相当度」と呼ばれる程度を表すことになるが、この「よきほど」よいほど」の表す「相当な程度」は、その基礎になる程度把握であつたと見てよい。

思うに、適当な程度を表すものには、それを目標視する

言い方も多く、そこに目標達成に向かう心理的な向上性がめだつた。また、それにもかかわらず行き過ぎを警戒して、目標がある程度達成されれば、それ以上は望まず欲望を自制しようとする傾向もめだつた。この次位的高度や中間度がまとめて概括される「相当な程度」は、それらの両方向のベクトルを共存させる過程で、おのずから形成されたものであろう。そのありようは、「適当な程度」をめざす営み中でこそ培われたと考えられる。

「よきほど」よいほど」の表す相当な程度も、すでに見た例(19)の第二・三例のように具体的には目標視して用いられることがある。が、次のように逆にその程度の目標視を戒める言説に用いられた例もある。

(20) 鶴の脛の長きと、^{かゝ}兎の足の短きとは、共に性也。長過たりとて、鶴の脛をよきほどに切りたらば、痛て死なむ。短しとて兎の足を、能ほどに継たらば、苦しむでしばらく立ことなるまじ。是、足の恰好はよくしても、其自然に任せざれば、其用をなすこと能はず。

(談義本・田舎壮子・上)

相当な程度の意義は、適当な程度をめざす営みの中で培われたが、文脈上、たとい目標視されることがあつても、相当な程度自体は没価値的であると考えなければならぬ。

「よきほど」よいほど」は、古代語を中心に見て、名

詞・形容動詞的であつたが、室町時代には、後述の「よつぽど」「よほど」の副詞化と連動するように、それにもその形だけで副詞的に用いられる用法が現れている。次はその一例である。

(21) およそ、能をよき程極めたる為手も、老いたる姿は得ぬ人多し。
(風姿花伝・二)

・劉仲ハ高祖ノ兄ナレドモヨイホド蒙氣シタ人ゾ。
(史記抄・呉王濞列伝・一四一才)

二 「よつぽど」「よほど」の成立と発展

一語化した「よつぽど」「よほど」の語形は室町時代から現れる。それにも名詞・形容動詞として適当な程度を表すものと相当な程度を表すものが認められる。しかし、原形の「よきほど」よいほど」に比べると、相当な程度を表す傾向が全体に強まっている。また、その室町期以降、「よつぽど」「よほど」で相当な程度を表す連用成分は、「に」を伴わない形の副詞になることが一般化していく。

二の一 成立時期と名詞・形容動詞的用法

「よつぽど」と「よほど」は、どちらも室町期の抄物にその早い例がある。

(22) 声聞戒比丘戒ノ四重ト云ハ、ヨツポドノ者ハ、犯スマ

イ事ヂヤゾ。

(百丈清規抄・348ウ)

(23)眉モ目モ両方マツ同ヤウデ鼻ノツキヤウモヨホドニヨ

ウ似合也。

(漢書抄・45ウ)

促音便形の「よつぽど」は『日葡辞書』にも登録されており、例も多い。しかし、「よほど」は登録されていない。室町期には「よほど」はまだ少数派のようである。その傾向から、「よつぽど」のほうが先に成立したと想定すれば、「よほど」はその促音を表情音的なものとして落とした形と解釈できる。ただ、両者の現れる時期には、現在知られる資料で見る限り、あまり明らかな先後は認めがたい。したがって、後述する類義語との張り合いなどから、もし従来の連語形に対してその機能を高める簡潔な一語化が望まれる機運が生じたと想定すれば、促音便形「よつぽど」とは別途に、「よほど」も同じ連語形から「よしゝよい」の語幹を前項にし、複合語として構成されたと見ることもできよう。

原形の「よきほどゝよいほど」にも、適当な程度を表すには、江戸時代になってそれを主語とする例(13)の言い方が現れていた。「よつぽど」「よほど」にもそれに似て、江戸時代にはそれを主語とする新しい言い方が出現する。

まず、原形にも古くからあった連用・連体・述語などの成分の例から示す。

(24)只逆旅デハ此ノヤウナル食物ガ、逐臣ノナガサレウド
ニハヨツポドデ有ゾ。

(四河入海・一・316才)

・其ヲ瑟ト云心ハ瑟ノ緒ノアワイガ広狭モナクヨツ程ニ
寸法ノ有ヲ云ゾ。

(毛詩抄・322ウ)

・是ハヨホドナ時ニ制セイデオイテ大乱ヲ起タ事ヲ刺
ゾ。(毛詩抄・420ウ)

・こりや待てやい、忠兵衛。よつぽどのたはけを尽くせ。

このような言い方に対して、「よつぽど」「よほど」を

主語として、「よしゝよい」を述語とする次のような言い方は、江戸時代になって現れている。

(25)無分別もよほどがよし、あぶないこちゑと、さしぞへ
とられ、

(浮世草子・寛濶曾我物語・二)

・肩するもよつぽどがよい。

(歌舞伎・傾城妻恋桜・上之口明)

古くからある用法に比べて、この言い方は「よつぽど」や「よほど」の意味が名詞として最も際立つ構造になっている。

江戸時代になってこういう言い方が生じた背景には、室町期以降、適当な程度や相当な程度を表すのに、後述の「よきころゝよいころ」「よきかげんゝいいかげん」といった類義形式が生じたことによる競争の激化が考えられる。

そういう若い形式への対抗上、「よつほど」「よほど」による適当な程度の表示にもその表現効果をより引き立てる新しい工夫が求められたのであろう。前掲例(13)やこの(25)のように、それを主語とする言い方の出現は、そういう類義形式との緊張関係に促されたものであろう。

ちなみに、江戸後期以降、適当な程度や相当な程度を表す類義の形式には、次のような「ほどよし」「ほどがいい」式の言い方も出現している。

(26) 程よきをこそ此里の語道徹底大粹といふべし。

(洒落本・烟花漫筆)

・ほどの能実のあるお人だといふ噂を仕たらば、

(人情本・英対暖語・四・一九)

・真白な頬の底に温かい血の色が程よく差して、

(夏目漱石・夢十夜・第一夜)

これらの言い方が散見されるのは、例(25)などより時期的には少し後のようである。適当な程度について、より分析的な言い方を求めるようになった時代の流れは、ここにも共通してうかがえるのである。

なお、室町期以降、形容動詞形の連体成分にも、次のように意味上は相当な程度を表すと見てよいものが多くなる。そこにその意義の使い方が中心化する傾向がうかがえる。

(27) サノミ力ノツヨウモナク、又サノミ力ノヨワウモナイ

人也。ヨツポドナ力ノ人ノ、ツブセヲウツテ、其石ノ落ル処ヲ為_レ界ト。

(六物図抄・36オ)

・とはいへ、余程な／金目の品を、／利息の抵_{かた}に_{して}やられ、

(河竹黙阿弥・人間万事金世中・二幕目)

右の第二例は役者が交替しながら、他の発言を引き取って言葉を続けたセリフ。意味上の相当な程度の優劣化は、後述の副詞化においてだけでなく、いわゆる形容動詞形の用法にもこのように認められるのである。

二の二 副詞化とその背景

原形「よきほど／よいほど」にも、室町時代には相当な程度を表す場合、前掲(1)のようにその形だけの副詞的用法が認められた。その時期の抄物では「よつほど」にもその形のまま副詞として相当な程度を表す例が多い。また、「よほど」にも同様の例がある。

その程度副詞としての「よつほど」「よほど」に担われる相当な程度は、先学の用語にならって、以下「相当度」と呼ぶことにする。次はその一例である。

(28) 諸方ヲアルイテスネ苦行ヲスルゾ。ヨツポド天下ヲメグリタゾ。

(史記抄・太史公自序・一九12オ)

(29) 坡ガ文潜ヲバ好イ手カキカナトホルゾ。坡ガ様子ヲ習ウホドニゾ。坡ニヨホドヲツ、イタゾ。

語義や用法の大きな変化は、表現に際して選択肢になる、別の言い方との競合によって生じたり、進行したりすることが多い。「よつぽど」や「よほど」における副詞の用法の普及、および、相当度への意義の集中も、そういう結果を導く選択肢が、室町時代以降、その周辺に生じたことを思わせる。前掲(2)の「よきほど√よいほど」の副詞的用法もそれに連動する動きであった。

そう考えてまず気づくのは、「よきほど√よいほど」

「よつぽど」「よほど」という一連の形式と類義性のある言い方に、室町時代ごろから「よきころ√よいころ」「よきかげん√いいかげん」といった新しいものが現れ、次第にその勢いを広げていることである。「よきころ√よいころ」には、前掲(2)のように適当な時期を表す用法もあったが、次にその適当な程度を表す例を示そう。

(30) いまのはまぐりをいれてにて、いかににもへたるとき、
たらをいれて、よきころににるべし。

(大草殿より相伝之聞書)

・ よひころにしんぜたらば、まつさかりの男におなりや
らう物を、おまらせすごひて、児におなりやつたは。

(虎明本狂言・葉水)

・ こちの人のどもりと私がしやべりと、入れ合せたら、

よい比な。

(浄瑠璃・けいせい反魂香・上)

「よきかげん√いいかげん」で適当な程度を表す言い方には過度化を抑制する意味あいの例もめだつてくる。「に」を伴わず連用的に用いられた副詞的用法で相当度を表す用法も例(32)のように一部に認められる。

(31) 酒塩にすたでをすこしくはへ、鴈のかはを入、よきかげんにいる也。
(大草殿より相伝之聞書)

・ よいかげんな事をいはしやれ。ところてん売が、此暑い夜あそんで居てよいもので御座るか。

(浮世草子・好色一代女・二・分里数女)

・ えゝ、いゝ加減にしなせえな。いや、よくしやべる男だ。
(歌舞伎・三人吉三廓初買・序幕)

・ 「……ゴシック趣味な石塔だつた」と迷亭は又好い加減な美学を振り廻す。

(夏目漱石・吾輩は猫である・四)
(32) 人間三百歳にもなりや、いい加減、諦めてゐるよ。

(太宰治・浦島さん)

このような類義の新しい言い方の出現普及は、当然「よきほど」系の形式の用途を浸食し、制限するようになったであろう。室町時代以降、「よつぽど」「よほど」には副詞の用法がめだち、副詞としては意味上相当度に集中することになるのだが、その変化は以上のような動きと相關し

ていると思われる。

なお、副詞「よつぽど」「よほど」の成立後、同様の相当度を表す副詞には、「だいぶん（大分）」「かなり」などの類義語も出てくる。が、この「よきほど」から転じた語形以前には、それに先行した類義の副詞は管見に入らない。程度副詞の表す相当度という程度のありようは、形容詞「よし」と程度を表す「ほど」の連語に始まる言い方をその先駆けとして、日本語副詞史の上に出現したと見てよからう。

二の三 副詞用法の広がり

江戸時代以降、副詞の用法には、種々の広がりが見られる。用法によってその出現にはかなりの時代差が見受けられる。江戸時代前期ごろまでは、たいてい既定の状態に用いられているが、江戸時代後期には、他と比較した相対的な程度差の表示や、推量・推定・仮定の表現、意志の持続の事後表現など、総じて志向性のめだつ表現にも用途が広がっている。

まず、既定の状態に用いられた例の一斑を示す。

(33) ヨツポド天下ヲ見マワリタゾ。

(史記抄・太史公自序・一九四才)

・首を曲げながら余程考へたあとで、

(夏目漱石・吾輩は猫である・九)

(34) 物ヲ知ル器量ガアツタゾ。王戎トヨツポド同ヤウニアツタゾ。

(蒙求抄・一三才)

・其牛肉屋の大戸のくぐりを出た時にはもう余程晩かつた。

(志賀直哉・正義派・下)

(35) 首尾の松はよつぽど跡に通り過やした。

(洒落本・遊子方言)

・それで余程前から武芸がして見たいと云ふ願望を持つてゐたが、

(森鷗外・雁・参)

例(33)は動作動詞と、(34)は形容詞・形容動詞を中心とした状態語と、(35)は量的に一方にひらいた時空名詞と、それぞれ共起している。いずれも現代語まで続く用法と言えよう。次に、他と比較した相対的な程度差について用いられた例は、今のところ江戸時代後期以降のものである。次にその一斑を示す。

(36) おれよりはよつぽど、ちゑのねへ男だ。

(滑稽本・東海道中膝栗毛・三下)

・此方こちらの家は貴方あなたのお家より、余程大尽ほとけだいじんですから、

(三遊亭円朝・牡丹燈籠・五)

・お傍で暮した方が余おれつぽど快はやよう御座います、

(樋口一葉・十三夜・上)

また、江戸時代後期以降、副詞「よつぽど」「よほど」

は、推量・推定・仮定、意志の持続などの志向的な表現にも広がっている。

推量・推定の表現に用いられた例には、次のようなものがある。

(37) 「御身金子も余程所持し給はん。何程懐中ありしと見へたり」と
(随筆・耳囊・六)

・よく先生が品切れにならない。余つ程辛抱強い朴念仁になるんだらう。
(夏目漱石・坊ちゃん・四)

(38) 子を持親は余程心得有べき事なり。

(洒落本・身体山吹色・二)
・「今日は余程暖いやうですな。」

(芥川龍之介・或日の大石内蔵助)
仮定条件に用いられた例には、次のようにその条件と帰結がともに打消を伴う形で、条件関係を限定する言い方がめだつ。

(39) 余程独創的な想像力がないと、こんな変化は出来ないのである。

(夏目漱石・吾輩は猫である・五)
・よほど目のいいひとでないと、マッチ箱の大きさの本の中に印刷されたきわめて小さな文字がよめないではないか。

(富岡多恵子・壺中庵異聞・一)
また、これらの言い方の後を追うように、意志と共起する言い方の例も現れる。それは「う／よう」などによる意

志の表示を「とする」「と思ふ」などに続けて、相当度の意志の持続を事後に示すものである。

(40) 郁治は見兼ねて余程帰らうとしたが、

(田山花袋・田舎教師・五六)
・どうしたら切れるか、よつぽど不行跡を働かうと時々思ふのよ。
(川端康成・雪国)

意志の持続を示すものには、次のように疑問も共起して、ためらいを伴う意志の持続の事後表現になっている例も多い。

(41) あたし、よつぽど黙つてようかと思つたの。……だけど、もう駄目……。
(岸田国士・驟雨)

・よつぽど、本郷の春日町まで行かうかしらと思ひました。
(太宰治・千代女)

江戸時代後期以降、相当度を表す「よつぽど」「よほど」の用途は、このように他と比較した相対的な程度差の把握や、推量をはじめとする志向的な表現にも広がっている。その存在がそれだけ程度副詞の世界に深く定着してきたことを思わせる。

おわりに

最後に本稿の要点をまとめる。連語「よきほど／よいほど」は、古くは名詞・形容動詞的に用いられて、適当な時

期、適当な程度、相当な程度と三つに大別できる意味を担った。

相当な程度は適不適の観点を離れて、次位的な高度や高低どちらにも偏らない中間度を、あわせて大づかみに概括する、程度のとらえ方である。そのような程度把握は、適当な程度が目標視される場合の、心理的な向上性と、過度化を抑制し自制するという、相反するベクトルを共存させる過程でおのずから成立したものであろう。

「よきほどよいほど」からは、室町時代以降、促音便形の「よつぽど」や、その促音脱落、ないしは、形容詞「よしよい」の語幹と「ほど」の複合による、「よほど」の形も現れた。それらにも名詞・形容動詞的に適当な程度や相当な程度を表すものが残るが、相当な程度を表す傾向が全体に強まり、連用的には相当度を表す副詞の用法が普及し中心になった。

室町時代以降、「よきほど」に始まる形式の周辺には、「よきころよいころ」「よきかげんよいかげん」という類義の言い方が現れて、取って替わろうとする勢いを示し、「よきほど」系の形式にも、それを主語とする新しい言い方が現れるなどの変化が認められる。江戸時代以降にめだつ、「よつぽど」「よほど」の相当度を表す副詞用法の普及は、それらの現象と関連していると考えられる。

江戸時代前期ごろまでの相当度を表す副詞は、既定の状態を中心に用いられたが、江戸後期ごろから、他と比較された相対的な程度差や、推量・推定・仮定、意志の持続の事後表現などの、志向性のめだつ表現にも用途が広がっている。

その発展が他の類義副詞（「だいぶん」「かなり」など）の動向とどのように関わるのか、それは今後に残る問題である。

注

(1) 「よきほどよいほど」「よつぽど」「よほど」の関係については、柳田征司『室町時代語資料による基本語詞の研究』第三節「ニッポン」（日本）と「ニホン」の注に、次のような言及がある。

「ヨッポド」は、「ヨキホド」とならべられているように、その音便形である。「よつ引き」の例からもそう考えられる。「ヨホド」の形があるために、これに促音を挿入した強調形が「ヨッポド」であると見る見方もあるが、「ヨホド」は『日葡辞書』にも掲出されておらず、「ヨッポド」を強調形と見なして、それに対する普通形として後に作られたものと見るのが妥当である。

(2) 森重敏「程度量副詞の設定」（『国語国文』二七・一、「日本文法通論」）では、意味を重視する分類のもとに、「よつぽど」による例は、「高度」や「相当度」を担うものの中に含まれている。

(3)

次の例(濁点・句読点は筆者による)には、「おおよそのところ。だいたい」などの意をこの副詞に認めて、その例とする辞書がある。しかし、その扱いには文脈上、偶然認められる意味が、その語義と誤認された疑いを持つ。まして、この語がその意味でこれらの推量・推定の言い方にまで直接かかっていると見るのでは、この語に陳述副詞的な働きを認めることになるだろう。それは納得しにくい。よつて、「昭襄王カラハヨツポド(ニテ)」「撓ト曲トハヨツポド(近ク)」などというほどのつもりで「ヨツポド」で中止した、軽い不整表現と見ておく。推量・推定と共起した早い例と見るべきではないと思う。

・昭襄王カラハヨツポド、百余年デアラウゾ。

(史記抄・秦始皇本紀・四六ウ)

・撓ト曲トハヨツポド、同コトサウナゾ。

(史記抄・酷吏列伝・一五三四オ)